郷土摂津いにしえ通信

第86号

平成１７年６月１日

発　行
摂津市教育委員会　生涯学習部　生涯学習課
〒566－8555　摂津市三島一丁目1－1
TEL (06) 6383－1111　(072) 638－0007
ホームページアドレス
http://www.city.settsu.osaka.jp/

ふるさとの川「淀川」

～川は流れる悠久の歴史の中で～

人類が出現する以前の原始･古代･中近世から現代まで時代別に淀川と摂津市の関わりに迫ります。

第3回

河内湾の時代　縄文時代は約１万３千年～１万年前からはじまります。この頃、対馬海峡が生まれ、日本列島は海に囲まれていました。それ以前は朝鮮・対馬・九州は陸橋のようにつながっていて、現在の日本海は北からの深い湾、あるいは湖のようでした。対馬海峡が生まれると日本海に暖流が流れ込みます。そして、シベリアから日本に向かって吹く寒気が対馬暖流から大量の水蒸気を奪い、日本列島中央部の山脈にあたって、奪った水蒸気を雪として落として北陸の豪雪など日本の気象のおおよそが決まります。日本列島というある種特殊な地形からくる日本的風土ができあがることとなります。

ヨーロッパの南北を遮るアルプス山脈は、温暖期、寒冷期に動植物・人間の移動を妨げ、いくつかの種の絶滅を招きました。しかし、日本列島も同様に中央に山脈を持ちますが、その山脈は移動を遮るほどの壁にはならず、寒暖の変化時、東西南北と移動の指標となりました。その結果、日本では他地域ではみられない豊富な動植物の種が残りました。それを採集して生活する縄文人は想像以上に豊かな生活を営んでいたことが分かってきました。

約 5000 年前、縄文時代前期には地球の温暖化は最高に達し、海面が最高（縄文海進）になります。以後、寒冷化がすすみ次第に海面は低下していきます。①河内湾（縄文前期ー中期）②河内潟（縄文後期ー弥生時代前期）③河内湖（弥生時代後期ー古墳時代）と変遷していきます。縄文海進によって広がった河内湾は、その後河川が運んでくる泥や砂により埋まっていき河川の河口には三角洲が形成されていきます。海面が下がり、湾が潟に、さらに湖となり、やがて陸地化していきました。縄文海進の頃、市域のほとんどは海の底で、千里丘付近が海岸線だったようです。しかし縄文時代の中期頃になると三角洲が著しく発達し、この時期には市域の大部分が陸地化していたようです（図１参照）。やがて河内湾の入り口に砂が沖積して陸地が伸び（天満砂州、吹田砂堆）、海の水が入りにくくなり湾は潟となりさらに湖へと変化していきます。淀川や大和川などが運ぶ土砂の沖積作用によってさらに陸地の部分が増えていきます（図２参照）。

←図1･河内湾
縄文時代中期

図2･河内湖→
弥生時代中期

○が摂津市のおおよその位置

大阪府文化財調査研究センター
『発掘速報展大阪･大河内展図録（2002）
松田順一郎氏作成原図』に加筆

お知らせ

平成17年度　文化財講座

上方文化と江戸文化

関西と関東の町人文化と世相

江戸時代は町人文化が華咲く時代です。上方では元禄文化、江戸では化政文化と関西と関東で特色ある文化が生まれます。文化の違いから関西と関東の町民生活や歴史に光を当てます。そこから見えてくる摂津市の庶民の文化とは？歴史とは？

と　き　平成 17 年7月 17 日（日）
午後1時 30 分～3時
ところ　フォルテ 301 多目的ルーム
講　師　睦沢町歴史民俗資料館
学芸員　久野一郎氏
申込み　当日直接会場へ
定　員　40 名
受講料　無料

ふるさと摂津講座　6月開催開始

摂津市とゆかりのあるテーマを選択し、古代からちょっと昔まで、摂津市の歴史を楽しく学習する講座です。講師はいずれもふるさと摂津案内人が努めます。

日　時　平成 17 年６月 15 日（水）午後２時～４時
会　場　摂津市総合福祉会館第１会議室
内　容　①山行きと年中行事　講師：塩見庄次郎氏
②新幹線鳥飼基地　講師：横田正明氏
定　員　60 名

ふるさと摂津講座はふるさと摂津案内人を講師に迎え来年の３月まで全７回で開催されます。ふるさと摂津案内人は文化財からふるさとの歴史を学習し、後世の人々に伝えていく市民によるボランティア学習グループです。本年度も 12 人のふるさと摂津案内人が日頃の学習成果を発表します。北摂の昔話から与謝蕪村まで多彩なテーマを準備しています。本年度もご期待ください。

受講に際しては、申込みは必要ありません。
直接会場へご来場ください。

第49回　埋もれた摂津市の歴史

１m等高線から見た摂津市

発掘調査で明かになる埋もれた摂津市の古代に光を当てます。

前号では昭和 36 年大阪府作成 3, 000 分の１地形図に摂津市の範囲及び近世集落の位置を加筆した地図から鳥飼上村・鳥飼下村・鳥飼野々村・鳥飼八防村・鳥飼中村・鳥飼西村など安威川以南の集落の立地状況について説明しました。今回は安威川以北の集落の立地について説明します。

北を北摂山地に西を千里丘陵に南を淀川に挟まれた摂津平野低地部では等高線はおおむね北東から南西に展開します。安威川以南では淀川堤防も同様に北東から南西に展開します。そしてその堤防上の標高４mを境に集落を形成されてきた事が覗えます。標高３m上にも集落は形成されますが、それ以下１～２mの範囲には選別して集落を形成しなかったようです。安威川以北は標高４mラインを基底とします。安威川の境を千里丘陵の段丘の端とするならば山裾は標高４mからとなります。そしてなだらかに傾斜し市域で一番高いところは、昭和 36 年当時の地形図では標高７～８mを測ります。鶴野村は標高５m、味舌下村は５～６m、正音寺村は６m、庄屋村は７m、味舌上村は７m以上と、標高１m単位に集落が丘陵に向けて形成されてきました。また三宅村の坪井、小坪井、太中、乙辻の各集落も５mラインを超えた６～７mの高さに北東から南西へ丘陵にそって集落が形成されました。安威川以北でも山田川、境川など大小河川が流れています。これらの河川は現在ではコンクリートで護岸され河川氾濫の心配は軽減されています。しかし当時、これらの河川も氾濫を繰り返したようです。発掘調査でも現在の河道から離れた場所で砂質土やシルト層など河川の影響が想定される堆積が検出される事があります。鳥飼と同様に安威川以北でも少しでも安定した高台に集落を営む努力を惜しまなかったようです。

（参）「淀川下流域における地形と河川流路の変遷『大阪文化財論集・大阪府文化財センター・2002』阪田育功」